

紀小鹿女郎の歌一首

一六六一番

ひさかたの 月夜を清み 梅の花 心開けて
我が思へる君

おほとものたむらのおほをとめ いろとさかのうへのおほをとめ
大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌一首

一六六二番

沫雪の 消ぬべきものを 今までに 流らへぬる
は 妹に逢はむとそ

おほとものすくねやかもち
大伴宿禰家持の歌一首

一六六三番

沫雪の 庭に降り敷き 寒き夜を 手枕まかず
ひとりかも寝む